
あっちとこっち

ゆさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あつちとこつち

【Nコード】

N5546Y

【作者名】

ゆき

【あらすじ】

職業、高校二年生。

私の日課は、叔父夫婦が経営する旅館の朝食準備や仲居さんの補助、その他お手伝い。

ある日、時間ぎりぎりまで旅館にいた私は、遅刻から逃れるべく自転車を全力でこいでいた。

学校はすぐそこ、セーフだと思った束の間、森の中で迷子になっていた。

森い！？

木漏れ日差すところから空を見上げれば、葉っぱの影に隠れて何か
巨大な物が飛んでいた。
あれって、飛行機だよね。そうだよ、きつと。だれかそうだと言
ってよー！！

*警告タグは、念のためという意味表示。

この小説を読む前に

この小説の書き方についての説明です。

私はこの小説を書くにあたり、『敢えて』というものを多用しています。

敢えて書いた、敢えて書いていない、敢えて説明した、敢えて説明しない、色々です。

何故こうしているのかというと、完全に主人公視点で作品を仕上げようと思っっているからです。

鍵括弧内の文は、会話を示しています。

鍵括弧以外の文は、すべて「私」の五感で体感した事、心情を書いています。

ご指摘頂いた『擬音』は、読む側に取っては『擬音』でしかありませんが、主人公には『音』です。

耳から聞こえてくる『音』という『情報』です。

文として【乗り物の駆動音】と書けば簡単ですが、これでは「私」に何の情報をもたらしていません。

上記は一例であって、他にもご指摘を受ける事が出てくると思いますが、こういったものを否定されると、この作品が書けなくなってしまうです。

とはいうものの、一度書いたものは最後まで書き上げたいです。

読む・読まないは、読み手さんの好みだと思うので何も言いませんが、上記の事を念頭に置いてほしいです。

宜しく願います。

【登場人物】（前書き）

主人公紹介。

【登場人物】

私

性別： 女

容姿： 黒髪長髪（二つに分けてお下げ）

整った顔立ちで、美人に分類される。

モデルのようなスレンダー体型

職業1：

職業2： 実家手伝い（叔父が経営する旅館の仲居さん代役）

職業3： 父の親友の小父さんのお手伝い

家族構成： 叔父夫妻

父母とは、産まれて間もなく死別。

嫌い： 特撮ヒーロー戦隊の様な、『正義は勝つ』な性格の人間。

（テレビで観賞する分なら良いが、現実では関わりたくない）

奇麗事を並べるだけの聖女の様な性格の人間。

（酸いも甘いもを理解している聖女なら、受け入れる）

好き： 食べることに

身体を動かすこと

暖かい場所

特技： 武道全般

炊事・裁縫

花道など、上流階級っぽい習い事全般。

車輛運転全般（法律は守るものなので、非常時以外は助

手席)

特殊能力を少々

他 : 友達付き合いは良好

婚約者がいる

非常に困った時だけ力押し

条理と不条理

私が思うに、世の中不思議なことがいっぱいあると思う。

どしゃ降りの雨の中を傘を差さずに歩いて帰ろうが走って帰ろうが、服が含んだ水分量はあまり変わらない、とか。

くしゅん。

昨日に濡れた水分量と今日濡れた水分量は違うのに、からなず風邪を引くとか。

二日も濡れれば、風邪引くか。全然不思議じゃなかった。

私を感じるに、世の中理不尽なことがたくさんあると思う。

二ヶ月に及ぶ極貧生活を抜けて、お気に入りの喫茶店でコーヒーを頼んだら、いつの間にか値上げされていたこと、とか。

ささやかなご褒美だったのに。

道路の真ん中をふらふら歩く小学生に自転車のベルを鳴らしたら、「うげえ、うげえ」と言われたこと、とか。

ああいうのが大人になるって、こわい。

あと、それから、学校への道を自転車で全力疾走していたら、いつの間にか見渡すかぎり巨木の生い茂る森に迷い込んでいたこと、とか。

ええ、そりゃもう、現在進行形で。

わけわかんない。

チリチリン。

敷かれたレールが歩いた後の道か

屋久島も びっくりだよね 大自然

一句詠んでみた。じゃあ、戻ろうかな。まだ後を振り返ってないけど、きつと通勤途中の人達がいるはずだ。迷い込んだのは、私だけではないはずだ。

よし、振り返ろう。でも、ちょっと怖いから目を閉じた。それから、自転車のハンドルを回して反転する。

さあ、きつとこの先に、進んできた道があるはずだ。

すーはーすーはー。深呼吸して、どくどくと緊張の鼓動を打つ心臓を落ち着かせて、目を開けば……。

森
だ
っ
た。

進むべき道は背後、振り返る道は前方。

歩いた後に道ができる、って言ったのは誰だ？

少なくとも、私が歩いてきた日常は崩れ去ったように思う。

だって、毎日通っていた町並みが消えているんだもの。目の前にあるのは、ただぼっかりと口を開いた薄暗い獣道。

これだって、獣道といえるのか。雑草が地面を隠しているけど、灌木の類はない。花もなければ、実をみのらせそうな植物もないみたい。

あるのは、私の身長を遥かに凌ぐ巨木だけだ。

この木って、何メートルあるのかな。地上十メートル？ 日本一高い山ぐらい？

うーん、そんなにはないか。都会の高層建築ぐらい？ まあ、とにかく大きいんだろうな。

地面を這う草に、幹が太く高すぎて葉っぱが見えない樹木。サバイバル生活には不向きな森。

ああ、私ってすごく落ち着いているよね、多分。こんな状況になったら、普通の人ならパニックだよ。帰ることができたら、小父さん達にに感謝しなくちゃ。

よし、とりあえずは自転車のハンドルを学校がある方角へと戻そう。それから、スタンドで固定して。

がしよがしよがしよ。

ペダルを踏みしめ、チェーンと後輪を回転させる音。
なんか音楽かからないかな。無音って寂しいよ。

最適なお供は、乗り物がエアポンプか食べ物か。

がしよがしよがしよがしよ。

前屈みになってハンドルに頬杖をついて、ひたすらごくよ。どこまでも。

地面とにらめっこ。泣いたら負けよ？ 気分的に。
にらめっこしましよ、あつぷつぷ。

おおっ！？ よくよく見れば、この獣道には轍っぽい溝があるじゃないですか！

ということは、なにか車輪がある乗り物が通るのね。車輪があるということとは、それなりに発展した文化や技術があるかも。

じゃあ、じゃあ、ここで頑張っていたら、誰かしら通るかもっ。

ううん、私は今、自転車というものに乗っている。通るかも分らない誰かを待つ必要なんてないんじゃない？

自分で進めば良いのよ！

そうとなれば問題は、どっちに進むかね。知らない土地だし、どっちに進んでも同じよね。ええと、そうね、自転車から降りよう。

轍と轍に沿って縦線と横線を描こう、爪先で。

ずりずり ざざっ ずりずり ざっ

線の先に『ハンドル』『左』『にだい』『右』と書いて出来上がり。
ハンドルと左は前進で、荷台と右は後退よ。

うん、よし。せっかくだから、定番の歌も歌おう。

あみだ あみだ どれにしてもあみだくじー わたしが線引いて選
んであみだくじー

得するの も 後悔するの も わたしだけえー ああ あみだくじい

ぐう

きまり！

全力前進あるのみ！！

お腹がなる音が聞こえたけど、きっと気のせいよ。

きゅ

さ、行くわよ。

えいえいおー！

木製か金属製か

るせんはつづくーよー　　いーつまあでえもー　　ちりんちりりん

なんて、寂しいから歌っているけど、体力温存を考えたら無口で自転車こぎたい。

あみだくじで決めた結果、学校へ通う道程をずっと真直ぐ進んでいる。もしかしたら学校が見えてくるかもしれないし。この轍を辿れば、人里があるかもだし。

ああ、きつとこつという切ない気持ちを、淡い恋心、というんだろう。私、今ちよつとだけ人肌恋しい。

実家が旅館経営しているから、つねにお客様や仲居さんに囲まれているし、一人暮らしというものが想像し難いの。

人、何所かに人いないかな。第一森人を発見、って大声に出して言いたいよ。

帰れないとしても、誰かと仲良くなって、お裾分けしたりされたり良なお近所関係を築きたい。

ん、お？　　よーし、木漏れ日はっけーん。急いで急いで自転車よ。到着。ああ、あったかい。良かった、太陽はあるのね。葉っぱの間から見える空と太陽は、すごく遠くに感じるのよ。見上げていると首が疲れるから、思い切って寝転んでみよう。制服に土がつくなんて気にしない。

ふふ、ひなたぼっこ最高。あ、こつちのお家は縁側があるのかな？
日本茶は？　　お米とかお味噌とかお塩とか、さしすせそ。
ぐう。

ぞぞぞ

ふあ〜。

あ、しまった。つい寝入ってしまったわ。
今何時かしら。あと、この音はなに？

ぞぞぞぞぞ

いまなにか巨大な影が横切っていなかった？

あ、ほらっまた！

あの影、何かしら？ 飛行機、だったら良いな。

あれが文明機器だったら、ここは日本だ。いや、日本でなくても地球上のどこかだ。

あー、ちよつと高いところに昇りたくなってきた。でも、この木つて、タマゴ肌も驚きのツルツル肌だから、引っ掛かりがないのよね。葉っぱの先の空を見たいよ。

ふいふいおーん

あ、また変な音がした。今度はなに？

でもこれは、上からではなくて、木々の間から聞こえているみたいね。

なんとなく金属音の感じがするわ。それで、けっこうスピードが出せるのかな、近づいているみたい。

此処は様子見しほうが絶対いいわね。

自転車のハンドルを左に切って、数本先に生える巨木の裏側に隠れた。

電車かバスか戦車か。

ふいふいおーん

ぷしゅ〜

がしょん

で、電車？ 乗り物よね？

バスかしら、キャタピラがあるし。

でも、やっぱり電車かな。左右両方に運転席が設けられているみたいだし。

中の様子は窺えない。側面に窓がないから。

運転席はどうなっているんだろう。私でも運転できるかしら。自動車っぽい運転席を希望。

ううん、この際細かい事は気にしない。ただ変な乗り物、これ決定。

特徴その一、キャタピラ。

車高が見上げるほど高いから、それにともなって高く長いのは理解できる。だけど、キャタピラ自体の幅は細い。これが、轍の正体なのか。重力でへし折れそう。

特徴その二、トゲトゲしたもの。

車体の周りに浮かぶ半透明のトゲトゲしたもの。あれは実体があるのかな、ぐるぐると回転している。車体の防御用か攻撃用かな。鋭く尖っていて、指されたら痛そう。

がたがた

ばしんっ

あ、搭乗員登場。

三人だけかしら。運転席に一人残し、二人が梯子を使って降りてきた。

「おい、居る様子があるか？」

「いや、分らない。騎車の音に驚いて、逃げたのかもしれない」

「だけど、徒歩なら、そう遠くまでは行ってないよな。殿下が発見された時は、倒れていたと仰っていたし」

「ああ。この辺を重点的に探そう」

倒れていた？ 私のことかしら。それなら寝ていただけです、とは言わない。

今は彼らが通り過ぎるまで、お腹の虫が鳴くのを、お腹に力を込めて止めるだけです。物音を立ててはいけません。

ピルルルル

「！」

「！？」

「なんの音だ？」

うどわうっ！？

け、携帯電話つ。嫌っ、止まって止まって！

つていうか、電波よ、何故にあるの！

道具入れか飛び道具か。

そ、そういえば携帯電話の存在を忘れていたわ。

原始的な風景も相まって、圏外だと思っただのよ。お願いだから、鳴り止んで。私、ピンチ！

かばん、かばんっ。ああどうしよう。かばんを振っても、呼び出し音が止まらない。

ああ、もうっ！！
せいっ。

「つぶ！！」

顔面直撃ヒットだぜ。

……………。

きゃー、お弁当、料理長！ 勢い余って鞆を投げてしまったわ！

「大丈夫か？」

「……、気絶したみたいだ。出血していないから、大丈夫だろう」

「慎重に行けよ」

「ああ」

そろりそろり、草を踏みながらこっちに来る気配がする。

どうしよう。ああああ、もう一人のしちやっだから、二人も三人も変わらないっ、多分！

力押しよ、力押し！ そうよ、私の得意分野じゃない。

「ぐほっ」

「！？ おいつ」

腰を落として低姿勢で素早く潜り込み、二人目の鳩尾に肘鉄っ。

ついで、一人目の顔に鎮座している鞆を掬い上げ、運転席目掛け全力投球。

「ぐふっ」

よし、命中！

嫌あゝ、料理長にお裾分けしてもらったお弁当があー。食べ物を粗末に扱ってごめんなさいっ。

急いで運転席に上って鞆を拾い上げる。

あとは退却あるのみ。

いや、エンジンを切って行こうかなっ。しかし、グズグズはしていいられない。うん、放置だ放置。

自転車に乗って。道、道はどっちだ。もう、どっちでもいいや。轍から離れたところを通って、来た道を戻ろう。時間を稼がなくては全力疾走よ。タイヤさん、道なき道を行くけどパンクに耐えてね！

あ、携帯電話。まだなってる。しかし、私を危険に晒した張本人だ。このままシラを切るのもいいかも。誰かは知らぬが、私の怒りを思い知れ。

ピ

「もしもし？」

『漸くでしたか。どこをほっつき歩いているのです？ 下らない反抗期などすぐに止めて、家に帰りなさい』

「……………、反抗期ばんざい」

『貴女は馬鹿ですか。とにかく一度、樋口小父上に顔をお見せなさい。一週間も行方不明になっているのですよ』

「誰がですか？」

『貴女に決っているでしょう』

はいいい？

今朝か七日後か

『どうかしましたか』

「一週間つて、ほんとう？ 私いま、浦島タロ子？」

『浦島太郎です』

「やだなあ、秋君。私でもそんなの知っているよ。だけど、私は女の子。だから、タロ子」

『知っていますか？ 鳥類は三歩歩くと、直前の出来事を忘れるそうです。雉並みの頭脳しか持てないのですか』

「雉は、桃太郎！」

『……貴女にとって、今はいつぐらいですか』

「九日の、んー、十時三十分くらい？」

『そうですか。しかし、今日は十六日で、時間は十一時二十七分です』

「そう、なんだ」

秋君が、私を騙してもなんの得にもならないから、本当に一週間たっているんだろう。

お腹はちよつと空腹を訴えているけど、咽喉は渴いていないし脱水症状もない。

迷い込んだけど、その日のうちに帰ってくる事ができたと思っていたのに。

時間の流れが違うのかな。

「ねえ、秋君」

『なんですか？』

「生きているって実感した」

『そう……。春休みになったら、また此方へいらっしやい。憎まれ口ぐらいなら幾らでも言っ差し上げますよ』

「うん、約束」

『ええ、約束します。では、切りますよ』

「うん。秋君、心配かけてごめんなさい」

『心配、などしていませんよ。時差ぼけしている様なので、十分に睡眠はとりなさい。では』

うん、帰ってきた。

徒歩のススメ

「おはよー」

「はよーっす」

「おはよう」

ああ、みんなの声が聞こえる。私にとっては四日ぶりだけど、みんなにとっては十日ぶり。へんな感じ。

「おはよー!」

「あ、やーっと来たわね。アンタがいないとつまんないったら」

「おはよう。風邪治った？ 大丈夫？」

「へーき、へーき。一週間寝込んだけど、そのあと凄くお腹が空いちちゃってさ、三日間はご飯食べまくってた」

「はあ、なにそれ。まあ、アンタらしいけど」

「病み上がり、そんなに暴食すると身体に良くないですよ」

「だってえ、寝込んでいる間はずっと重湯だったんだよ？ 叔母さんに何度もおねだりしたけど、アレしか出してくれなくて。噛めないから嫌い」

「女将さんの気配りを台無しにしてどうする」

ほっぺを抓られ、ぐりぐりと揉まれた。

ああ、やっぱり普通の生活って良いよね。ここが私の世界だ。

「そういえば、今日は登校が早いですね。いつもギリギリセーフって駆け込んでくるのに」

「ん？ あ、今日はね叔父さんが手伝いはいいから、早く行けって徒歩で」

「自転車は？」

「ペシヤンコになった」

「は？」

「え？」

「体力取り戻せーって。タイヤをワザとパンクさせて、おまけに車輪もグニャ〜って曲げて、ブレーキとか細々分解して」

「そ、そうなんだ」

「ん、そうなんですよ」

「相変わらず、理解不能なスパルタね」

「ねー、ヒドイでしょ？ 分解した自転車を自力で直せたら、自転車登校して良いっていうんだもん」

「っていうのは、ウソ。」

ホントは、いつも通りに自転車に乗ったら、叔父さんが勢い激しく飛び掛って来て、自転車ごとなぎ倒された。逃げ遅れた上に受け身に失敗したから、自転車と地面の間に足を挟んで擦り傷つくったりして、地味な痛みを我慢中。うゝ、ヒリヒリするよ。

授業のススメ

私は、高校生であった。

不可抗力とはいえ、十日間は学校を休んだ。欠席理由は行方不明とは書けないから、無難に下痢と発熱が続いた、と記入しておいた。友達からノートを借りて書き写しながら、各授業のポイントなどを聞いてまとめた。

さよなら愛しの単位よ。いつか補修で必ず貴方と再会するわ。それまで待っていて、約束よ。

今日の体育。見学なんて嫌だから、叔母さんから体育教師宛の一笔を隠して出席したら、すぐに捕獲された。なんか叔母さんが、私の行動を見越して電話連絡を入れたらしい。うーん、悔しい。体動かしたい。

お昼。待ちに待ったお弁当の時間。

料理長特製の具たくさんスープ。ありがたく頂きました。

あの時のお弁当は、腐っていた。振ったり投げたりしていたから、おかずがお弁当箱の半分に片寄っているのを覚悟して蓋を開けたら、ツンと香る酸味が強烈な異臭が漂った。すぐにゴミ箱に捨てた。本当に粗末にしてしまいました。料理長、ごめんなさい。

そして、その時から境に、身体中の水分がなくなったかのような感覚に陥って、声が嘎れ始めて喉が焼けるように痛くなった。

遅れてきた脱水症状。続く空腹。

三日間、水分と食料を求めて、家の中を這いずり回った。どこを探しても、重湯しか出てこなかった。

お気に入りのコンビニスイーツのクッキーでさえ、私の部屋から消

えていた。叔母さんは手強かった。

放課後。今日はよく頑張った。

友達にちよつと遊ぼうよ、と誘われたけど断って、帰ることにする。帰りも徒歩だ。理由は分らないけど、登下校中は走ったりスピードがでる行為を控える様に、叔父さんにきつく言い渡された。自転車に飛び掛ってきたのも、それが理由らしい。

ゆっくり町並みを見渡しながら帰路につく。改めて見入ってしまうほど、何かに飢えているように思う。

しばらく歩いて行きかう人の気配がなくなった頃、見計らったかのように向かい側から黒い自動車が静かに姿を現した。見覚えがあるナンバーだったから、私は立ち止る。すると自動車もすぐ側で停車し、ドアを細く開けた。

「乗れ」

馴染みのある声音は、いつも有無を言わせないのである。

ススメよ、ススメ。

緩やかに動き出す自動車。

途中の曲がり角を使って方向転換するのかと思っていたら、歩いて来た道を進み、高校の前を通り過ぎ、家がある方角からどんどん離れていった。

小父さんが来たということは、仕事の話よね。現場近くで説明されるのかな。でも、一応確認をとろう。

「小父上、道が違います」

「お前が一番引っかかりやすい。用心の為、市街地を一周して家に向かう」

はて、引っかかりやすいとは何のことだろう。

ナンパとか勧誘？ いやいや、それは無い。この辺りは古都とも呼ばれているから、行政も警察も取り締まりは厳しくやっている。

うーん、いくら考えても見に覚えがない。

家でのミーティングなら、まあいいか。深く考えてもしょうがないよし、町並みに集中しよう。

「これを」

アイマスクとノートパソコンを渡された。アイマスクは薄い布製の物ではなくて、隙間から光が入らない様にながしり覆われている。

「外は見るな。用心している意味が無くなる」

市街地を一周するだけなのに？ なんだか徹底的。映画の様な誘拐劇でしょうか。

気分は、地域を仕切る組織に認められていないモグリの密売人、になりそう。

叔父さんも小父上も、拷問っぽい稽古とか喜々としてやりそう。で、ぶっ倒れたら、お仕置きと称して腹筋一万回とか。

「ブラインドタッチで報告書を作成しろ」

ああ、行方不明中の体験記が欲しいのね。うん、わかった。わかつ

た、わかったです。

「キーの位置は大体分るだろう。とにかく打て。あとは此方で組み立て直す」

お察し、ありがとうございますっ。

時には振り返る

「書き直せ」

手探りで作成した報告書は酷い出来だったらしい。小父上は単語の修正も補完もすることなく、早々に消去した。

だったら、普通にモニターとキーボードを見させてよ。二度手間じゃない。私は、人差し指でパソコンとにらめっこ派なのよ。数字のキーは、電卓と同じ配列が良いと心底思うのよ。

たつぷりと時間を掛けて家に到着した自動車は、私達を降ろすそのままどこかに走り去った。

家にあがり、小父上を応接間にお通しする。お茶を用意しようとしたら、いらないと断られた。

「仕事だ」

ソファに腰を落ち着けると、間髪入れずに小父上は切り出す。

「この辺り一帯で、行方不明または失踪事件が多発している。年齢層は十代後半から二十代半ばの青少年。性別は男女半々。自転車で通勤通学をしている者ばかりだ」

「私も、そのうちの一人？」

小父上は微かに頷く。

「彼らは早くて翌日、遅くて三日後には発見されている。軽い脱水症状と空腹を訴えているが、外傷は無い。そして、口を揃えてこう言っている。森を見た、と」

「見た、ですか？ 森に居た、ではなくて」

「見た、だ。異変に気付いて直ぐに引き返した者もいれば、一時的な目の錯覚だと思い、直進することを選んだ者もいる。後者は、途中で不可視の壁の様な物に行き当たり、そこより先に進めず戻ってきたと言っている。ちなみに、自動車でそういった事件は起こっていない。条件は、自転車、人力、青少年だ」

壁なんてあったのかしら。すいすいと進んじゃっていただけ。

ん？ じゃあ、叔父さんはそれに気付いて飛び掛ってきたのね。止め方が過激だったけど。

「本題だ」

小父上も私も居住まいを正した。

「お前が消えた」と報告があった同じ日の午後、四歳の女兒が母親の目の前で消えた」

テーブルの上に一枚の紙を置き、読めと促される。

「先に行く母親を追い、子供用三輪車を力いっぱい進めていたそうだ。速度、というのも一つの条件かもしれない」

人力の乗り物であれば、種類を問わない。それから、通常よりもスピードがでる乗り方をしている、のかしら？ じゃあ、自転車組みは、遅刻ぎりぎりセーフな人達ね。ちょっと安心、してどうするんだ私。

「母親は錯乱状態に陥って入院中だ。辛うじて聞けたのが、突然消えた、だ」

「そのお母さんは、森を見てない？ でも、どうして。壁があるなら、進めないはず」

私はかすりもしなかったけど。

「母親が森を見たかどうかは分らないが、子供は神秘の力が強いという。物心付く年頃とはいえ、まだ神秘側に偏っていたのかもしれない」

「それで壁に気付くことなく、通り過ぎてしまった？」

「もしくは、お前だ」

「私？」

「森は、此方の世界ではない。向こうにいる何者かが、何かを探して、此方とあちらを繋げた。探し物の条件に合っていたのかは知らんが、お前を見つけてあちらに渡した。その繋ぎ目を閉じるのを忘れて、女兒が通ってしまった。もしそうだとしたら、何者かは相当な間抜けだな。……仕事内容は、女兒を取り戻すこと」

小父上は言った。

「もう一度、向こうに行け」

そして、また進む。

行方不明中の女の子のご家族から、女の子が大好きなキャラクターがプリントされている小さなリュックサックを借り受けた。小さいペットボトルのスポーツドリンクを数本とチョコレートペーストを練りこんだ栄養補助食品を入れて、ファスナーを閉めた。必要最低限の物しか入れていないが、女の子は私よりも長く向こうに行ってる。これだけで足りるだろうか。

「お前は耐えられるが、子供は危険だ。此方に戻る前に、必ず水分を摂取させる」

「はい」

「衰弱している可能性があるかもしれないが、発見次第、自力で三輪車を運転させる」

「了解」

ショルダーバッグを肩に掛け、自転車にまたがる。

「条件は解っているが、いつ向こうに行けるのかは運次第だ。渡れるまで、この道を往復しろ」

「はい」

叔父さんが言うには、事件が起こり始めてからというもの、この辺りの道路は人の往来が減ったそうだ。生活道路にしている通ることを止むを得ないご近所さん以外は、観光客を乗せたタクシーでさえ近道には使わなくなった。

「まあ、そう変な目では見られまい。行け」

一回で森にいけることを願い、猛然と速度を上げる。ある程度進み、折り返す。また速度を上げた。

見えた、あの森だ。だけど、見えただけでは意味を為さない。

さあ、私をそこに渡せ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5546y/>

あっちとこっち

2011年11月21日22時46分発行